

Title	<書評> 上野修『スピノザの世界-神あるいは自然』
Author(s)	中野, 彰則
Citation	メタフュシカ. 2005, 36, p. 89-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7058
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【書評】

上野修『スピノザの世界 ― 神あるいは自然』¹

中野彰則

スピノザ哲学について、日本語で書かれた、あるいは日本語に訳された入門書ないし概説書は、決して少なくないと思うが、これほど読みやすい文体で書かれているものを評者は知らない。しかし、だからといって本書の内容が表面的で平易なものというわけではない。むしろ、哲学に特有の用語を羅列して「思想や主義の解説チャート」(12)になることを回避しながら、その体裁がとる新書の目的である「万人の教養」という枠を超えた、スピノザ哲学の理解を読者に与えてくれる。その意味では、著者があとがきで述べているような「手軽に手に取れて、しかもじっくり中に入り込めるようなスピノザの入門書」(192)を書くという目的は見事に遂げられている。本書はスピノザの『知性改善論』と『エチカ』を中心に構成されているが、まず主著である『エチカ』への導入として『知性改善論』から始められ、続いて『エチカ』についての解説がなされる。本書が「じっくり中に入り込めるような入門書」として成功しているのは、『知性改善論』から『エチカ』各部に至るこの全体の構成において、議論の流れが途切れることを感じさせない点に存すると言えるだろう。実際、入門書という性格上読者を飽きさせず一息に読めることが重要視されているという側面もあるのかもしれないが、本書が著者自身の関心によって貫かれているということが大きい。読者はひとつの問題系列に従い、『知性改善論』から『エチカ』、あるいは『エチカ』各部の解説において、各々の枠を意識せずにすんなりと読み進めることができる。以下では、各章について第一章と第二章を中心に要約した上で、その著者のスピノザ解釈の支柱となっているのが「真理」、「必然」、「永遠」という三つの概念であることを示す。乱暴を承知であえて一言で要約するならば、本書の試みはスピノザにおける「真理」概念の分析をふまえて「必然」という様相の問題を考察し、その哲学にとって重要な「永遠」概念とは何かを説明することにある。それをふまえて、最後に評者の関心の観点からいくつかの感想を述べたい。

¹ 上野修『スピノザの世界 ― 神あるいは自然』、講談社、2005年。引用箇所のパージ数を丸括弧内に記す。

まず、「企て」と題されている第一章では、『知性改善論』の冒頭から話が始められる。スピノザの哲学が一般に難解であるとすれば、それは主著『エチカ』が非人称的であるがゆえであろう。そこで読者が入り込みやすいように、まずスピノザその人が問うた「私はいかに生くべきか」の問題から話が始められる。しかし注意すべきなのは、それが昨今盛んな「自分さがし」などではなく、スピノザ自身の「私」をめぐる一人称的な問いを入り口に非人称的な世界まで進んでいくためである。「スピノザが珍しく彼の経験を語ってくれるのは」(29)、われわれの精神が自分でも思いもよらないものであることに気付いてほしいからだ、と著者は言う。一般に「ある目的遂行のために我慢しなければならないとわれわれは考え、それを守れないなら目的は果たせないと考える」(ibid.)。あるいは道徳家は「善なる目的のために欲望を断念する」ことを唱える(35)。しかし、そうではない。実際、知性によって目指されるべき「最高の幸福」の探究において、知性と欲望は対立などしない。世俗的な善としての所有欲や名誉欲や官能欲などへの執着は、それを捨て去ろうとする決心によっては捨て去ることは出来ないことをスピノザは正直に告白し、むしろ探究の開始によって禁欲すること自体に意味がなくなることに彼は気づく。われわれは自分で立てた「目的」に向かって行動していると思いついていく。まずわれわれの中に「衝動」というものがある、それが「欲望」として意識され、しかる後に「この欲望意識をもとに、自分はしかじかの目的に向かって自由な意思で行動しているのだと解釈」(32)しているのである。すなわち、「衝動はなまの形で意識にのぼることは決してなく、いつも目的を伴った欲望に加工されて経験される」(35)。そして「目的」の意味は逆転される。「目的」とは衝動が規定する欲望の強度として現れる。つまりより強い欲望がより強い善なる「目的」として現れるだけのことにすぎない。では最大の欲望とは何か。それは自らがより完全になりたいということだ。そしてこの「最高善の実現が究極の目的であり、この実現につとめることが最高の幸福である」(38)。このように、スピノザの考える「最高の幸福」とは、世俗的なものでも、道徳家の唱えるような善悪に基づくものでもない。それは自己の欲望を絶対的に肯定しつつ、世俗的な欲望ならびにそれらの禁欲を無意味なものにする。これこそが著者の言うスピノザの倫理的な「企て」なのである。

では、こうして明らかになった目標に対して、われわれはどのような方法をとるべきか。第二章「真理」においては、続けて『知性改善論』からスピノザの考える方法が解説される。スピノザにとって「真理」とは何ら特別なものなどではない。神や啓示に関わるような「深遠な」ものだけが「真理」なのではない。「犬であろうと三角形であろうと神であろうと、それらについて何か真なる事柄が言われるなら、それは同じ単一の意味で『真理』と言われる。そこにこそ深遠な神秘が存在するのである」(44)。著者はこのようなスピノザの真理概念を「あまりにまっとうすぎてかえって異様にさえ見える真理の考え方」(43)と評する。通常、「真理」を発見するためにはどういった方法がよいのかが考えられてきたのだが、スピノザにとってそれは問題ではない。たとえ限られたものではあっても、われわれは「2たす3は5」のような「真理」を知っており、先ほども述べたように、それは神についての「真理」と「単一の意味で」存在しているのであるから。それゆえ説明すべきなのは、「真理」を真たらしめているような「規範」についてである。そのような「規範」とは観念が指す事実との一致なのであって、それゆえ一般的な基準や規則などではなく、個々の観念に備わる

ものとしてあり、それゆえ「抽象的に考えてはならない」(47)。ただし、そのような「外的標識」としての、思考の外にある「対象との一致」だけではなく、思考そのものの内にもそれを真と言えるための標識がなければならない。必ずしも、対象が思考の外に現実化しているものでなければその観念が真であるとは言えないはずはないからである(本書 49 ページの具体例を参照)。またさらに、それが真であることはそのために前もって必要なことは何もない。「われわれには真なる観念が与えられており、そのことをその観念だけでわれわれは知っている」(51)。では、問題は自ずとそれを可能にしている「内的標識」とは何か、ということになるはずである。著者の考察は『知性改善論』での議論をさらに進めて、「内的標識」を解明するためにスピノザの特異な様相論へと向かう。そこではまず「虚構」概念に光が当てられる。例えば、「四角の円」のような不可能なもの、「2 たす 3 は 5」のような必然的なものについて、われわれは「虚構」することはできない。われわれが「虚構」するのは実際、可能的なものについてだけである。しかしそれについても、その不可能性あるいは必然性ならしめる原因を知るならば、その場合に「虚構」することはもはやできない。そして著者は「内的特徴」について、次のように結論する。「ここから、真なる思考を絵空事から区別するリアルな何か、『内的標識』が明らかになる。それは、語られている事柄の必然性にほかならない。言い換えると、真なる思考とは、自分が考えていることが別なふうでありうるとは決して考えることができないような、そういう思考である」(55、傍点引用者)。例えば「半円が回転すると球が生じる」場合、「半円が回転」というのは偽なる観念である。なぜなら、半円が回転しなければならない「必然性」はないからだ。しかし、「半円が回転すると球が生じる」のように「必然性」をそこに見出すならば、それは真なる観念なのである。ところがわれわれの思考は、有限で「切断され欠損した」ものとしての非十全な偽なる観念をもつ。したがって「そういう部分的欠落を可能にしている構造がなければならない。それは、われわれが、いつさいの事物をあるがままに知覚しているある巨大な思考する存在の局所的な一部分である、ということだ」(66)。またそのような思考全体、「それは世界の限界、思考の限界である。その内でいつさいの事物とそれについての思考が存在し、その外には何もない。その外というものがそもそも思考不可能な、それゆえ無限かつ唯一なる世界なのである」(67)。それこそがまさに、スピノザが言う「自然の源泉と根源」であり、「無限なるもの」ということになるであろう。そしてまた無限な「自然の源泉と根源」とは、いかなる他のものにもよらずそれ自身によって説明されなければならないようなものであるだろう。だとするならば、これが『エチカ』においては「神」ないしは「自然」と呼ばれているものであることは明らかである。こうして著者は『知性改善論』から『エチカ』に至る道筋を見事に示してみせる。

そして第三章は、その通り「神あるいは自然」と題され、『エチカ』へと話は移る。ここでは、『エチカ』第 1 部に相当する課題として、「それ自身の有(かくあること)以外の何ものも説明のために必要としない X」(73)の探究、すなわち先に見たような無限な「自然と根源」としての「実体」という概念をスピノザはどう考えたのかを明らかにする。もちろん、結論に至るまでには「実体」を巡る非常に興味深い重要な議論が本書では展開されているが、いまここで読み取っておくべき点だけを要約しておこう。すなわち、唯一の「実体」である神は、「自己原因」として自らを「必然性」

のもとで存在させている。そして、すべてはそのような神から必然的に「帰結する」(98)。「現実の中に出てくるあらゆるもののあり方は、神の本性の必然性からとぎれなく出てくる。言い換えると、現実のすべては必然的にこのようであり、別なふうではありえなかった、ということだ」(102)。では、「人間」はどのように考えられるだろうか。第四章「人間」では、第二の課題である「われわれの知性を実体(神)によって説明すること」が『エチカ』第2部の読解を通して試みられる。ここでは、スピノザがデカルトを徹底化するところから始めていることがまず語られる。「実体」を「それが存在するためには他のいかなるものも必要としない」と定義するからには、厳密に考えれば「実体」とは神のみであって、デカルトによって被造実体と考えられた人間の身体や精神は神の「様態」でしかない。したがって、人間の精神とは神の中にある観念のようなものとして考えられることになる。ここで著者は読者に注意を促す。「スピノザの話についていくためには、何か精神のようなものがいて考えている、というイメージから脱却しなければならない。精神なんかなくても、ただ端的に、考えがある、観念がある、という雰囲気でも臨まなければならない」(108)。ここはわかりやすく書かれている本書においても、理解の困難な箇所のひとつであろう。紙幅の都合上、評者なりの理解に従ってまとめるならば、概ね次のようになるだろう。観念の秩序と事物の秩序がどちらも先行することがないというスピノザの並行論のもとで、現実に存在する、ある人間の身体についての真なる観念は、あらゆる事物についての真なる考えからできている「無限知性」の中にある。そして「身体の観念」こそが人間精神であるという場合、そうした人間精神とは思考の無限連鎖における局所的なものにすぎない。ここで再度注意が促される。その「思考」とは誰のものでもない。「スピノザは『考える実体』を消去しているのである。神の巨大な精神が考えているのでもなければ、人間サイズに小型化された精神が考えているのでもない。思考の無限連鎖が自ら継起しながら思考しているのである」(119)。したがって「われわれはいまだに、人間には知性や意志、感覚といったメンタルな能力がそなわっていて思考しているのだと言っているわけだが、スピノザにとって、そんな独立した能力は存在しない。無限知性の中で身体の観念になっている神の思考がその局所で知覚を生じていて、それに十全なものもあれば非十全なものもあるというだけである」(130)。こうして著者が本章の冒頭で述べていた、人間の知性とは必然性に従って駆動している一種の「オートマトン(自動機械)」だということの意味が理解される。

この現実はいかなるふうではありえなかった、人間に自由意志などないと結論してしまうならば、いったい人間の「倫理」はどうなってしまうのか。著者は続く第五章「倫理」において、第三の課題すなわち以上の解釈から「われわれ自身について何が言えるようになるか」という、必然主義のもたらす倫理的な意味について、『エチカ』第3・4部、そして第5部の冒頭までを説明する。スピノザによれば、「自由意志の否定」とは実際のところ、実生活において有用なのである。このスピノザの考え方を、自分・神ないしは世界・人間・社会への「ゆるし」として著者は解釈する。全面的に自己を肯定し、すべての存在は「必然性」のもとで、神の思し召しでも誰の意志によるのでもないことを理解する「強さ」によって、不安や期待を取り除き「絶対的な安心」を獲得すること。そして、他人によって喚起される憎しみや妬みなどが自分自身の感情の働きであることを理解してその原因を知ることで他人をゆるし、清廉潔白でも無垢でもないそのような人間たちが、しかし

自らすすんで参加し共同して生活を営む社会を形成するためにはどう「術策」を講じられるかを考えること。もちろんこれに対する疑問があることはスピノザもそして著者自身も十分承知である。「自分をゆるし、世界を、人を、社会をゆるす。そんなのは結局、現状肯定にすぎないじゃないかといふかる向きもあるだろう」(158)。しかし現状を「不完全」なものと嘆くのは、われわれの勝手な考えである。いかなる事物も誰かのために存在などしていない。スピノザによれば、あるものが「完全」だ、あるいは「不完全」だなどというのは、それを他のものと比較するからであって、「真理」について見たように、「必然性」のもとでは「一切は等しく完全で、いかなる点においても欠けるところはない」(160)。「完全」であれ、と命令するのでもなく、現状を「不完全」として憐れみ、ただあきらめのうちに肯定するのでもない。まず現状を端的に理解すること。これこそが著者の言う「ゆるし」であり、スピノザ「独特の事物の愛し方」である。著者も述べているように、こうしたスピノザの考え方は、ニーチェを想起させるものであるし、ニーチェ自身スピノザを自らの「先駆者」と述べている。しかし、「神の死」を謳うニーチェとは違い、スピノザは神とともにある。最終章「永遠」では、神とともにあることの意味が説明される。そも「永遠」とは何であるのか。それは時間によって説明されるものではない。「三角形の内角の和は二直角」がその始まりと終わりを問うことが無意味な「永遠真理」であるように。「スピノザの永遠は、無限に永く存在し続けることでもフリーズした無時間世界でもない。いまそこに現実に存在していることが永遠なのである」(175)。そして事物が「今ここに現実に存在している」のは、偶然などではなく必然によるのであり、その意味においては「別様では決してありえない唯一の現実」(ibid.)が生起している。これが事物を第三種認識によって「永遠の相のもとに」見ることである。もちろん、第二種認識である理性は事物の必然性を理解してはいるが、それは「いま、この」という個物への認識を欠いた一般法則としてでしかない。この章では「リアル(タイム)」という語がたびたび用いられているが、それは万人普遍に妥当する「私」一般についてではなく、「間違いなくこの世に一人しか存在しない」「未来永劫だれも私に代わることはできない」という場合のほかならぬ「この私」を「リアル(タイム)」に感じるという意味であろう。目指されるべき「最高の幸福」は「自分というものが唯一であることと神が唯一であることは同じ比類なき必然性で結ばれているという、目の眩むような榮譽を感じる」(190、傍点引用者)ことからすると著者は述べている。

以上、各章を簡単に要約してみたが、評者自身の力量不足のせいで、スピノザ哲学について極めて簡潔に解説されている本書を、むしろわかりにくくしてしまった、あるいはスピノザ哲学についての解説の単なる解説になってしまったかもしれない。とりわけ最終章については本書そのものを読んでもらうほかはない。ただ、少なくともここで明らかにできたと思うのは、冒頭でも述べたように、著者は本書において、一貫して「真理」という概念を鍵にして、それを「必然」や「永遠」といった概念と関係付け、『知性改善論』から『エチカ』第5部にまで到る議論の骨格を明確にして、スピノザ哲学を一気に読み解くことを試みているということである。そしてそれによって、第一にスピノザ哲学の持つユニークさが、いかにして「真理」に到達するかではなくまず「真理」があるのだという発想の転換に基づいているということがわかる。さらに、それをふまえて倫理

上の諸価値の転倒が計られる。本書を読んでスピノザ哲学の一端に触れた読者の眼前には、「われわれが日々見なれている現実と寸分違わないのに」(190)、以前とは違う見たこともない光景が広がっているはずだ……。もちろん、入門書ということもあって、著者自身の一貫した関心によって貫かれているとはいっても、それゆえに見落とされているあるいは意図的に捨象されているものはあるだろう。例えば「無限」という概念はそれに該当するものではないか。評者自身の関心から言わせてもらえば、『エチカ』において「永遠かつ無限」という表現が何度か登場するように、等しく重要である「無限」について、著者がどのように考えているのか知りたかった。評者なりに少し述べておくと、まず「永遠」というものが時間では説明できない、あるいは時間とは関係がないということは、それが表象されえないもの、あるいは抽象できないものであると言えるはずである。「無限」についても同様、『エチカ』第1部や書簡などにおいて、それは抽象されえないものであり表象してはならないものであることが言われている。それは何か同じ事態を指しているように思えるのであるが、だとすれば「真理」あるいは「必然」を媒介にして「永遠」と「無限」の関係について考えることは可能ではないだろうか。また、第六章において個物の認識の話がされるが、個物の定義として「有限で定まった存在」ということであれば、その「有限」な個物が「永遠」であるという認識をどのように理解すればよいのだろうか。つまり、もし「永遠かつ無限」というようにそれらが何かしらリンクするものとして考えられるのであれば、「永遠」なものと認識される個物の有限性をどう考えられるのか、ということである。第三章末尾における様態化の説明では、「有限な様態は…無限様態の一部」とされていた。やはり評者には「永遠」と「無限」(「有限」の問題も含めて)が認識においてどう区別されるのか(あるいはされないのか)が気になるところである。また、最終章「永遠」、とりわけ「神への愛」と区別される「神の知的愛」について以降の説明は、むしろ『エチカ』の第5部そのものが難解なのであるのだから当然ではあるけれども、そこへ至るまでの平易で断絶を感じさせない叙述に比べて、やさしい文体にもかかわらずさかさか理解が困難な印象であった。しかし、本書の入門書としての意義を考えれば以上のような疑問点は瑣末なものであって、それらによって本書の意義が少しも損なわれるものではないことは断っておく。

(なかのあきのり 現代思想文化学・博士後期課程)

「キーワード」

真理、必然、永遠